

島根の中山間地から Work as Life

第1回 ラポール

野中 浩一

ラポールの源泉 ～祖母と田舎の憧憬～

昨年の12月、私の母方の祖母が亡くなった。94歳だった。亡くなる2週間前まで、木々と田畑に囲まれた中山間地域の一軒家で、同じく94歳の祖父と2人で生活していた。日本昔ばなしに出てきそうな、田舎の、腰の曲がった、優しい笑顔の祖母であった。



祖父母宅

私は、父の全国転勤により様々な土地で暮らしてきた。高校卒業後は愛知で大学生活を送り、東京での社会人生活を経て、そして15年前に祖父母のいる島根県に妻とともに移住した。

移住後は毎月のように祖父母宅を訪ねていたが、私は祖母のことをほとんど知らない。何度か尋ねたことはある。しかし祖母はあまり語りたがらなかった。私が唯一知っていることは、10代で看

護師を目指して上京するも、すぐに挫折して島根に戻ったことであった。このことも祖母からではなく祖父か母から聞いたように思う。

祖母は家から出ようとしなかった。私が知る限り、この15年間で2回、出かけたとの話を聞いた。夏バテと風邪が重なったのか1週間ほど食事がほとんど取れず周囲の強い勧めで近所の病院に行った時、私の母が大病を患って入院した時、その2回しか私は知らない。以前はもう少しは出ていたようであるが、私の幼少時より、祖母がどこかに出かけている記憶、一緒に出かけた記憶はない。

30～40年前、私が子どもの頃、祖父母宅は私の住む家から地理的に遠く、4年に1度訪ねるくらいであった。その時から、そして私が島根に移住して毎月通うようになってからもずっと変わらず、私たち家族が祖父母の家を訪ねると外まで出てきて出迎え、祖父が普段買い物する商店よりちょっと遠くて大きいスーパーで買ってきたお寿司やお肉と、自家製野菜で作った数々のお惣菜でもてなしてくれた。祖母はよく「(料理が)何もなくつまらんねえ」「それで足りるの?」と食べきれないほどの食事を前に何度もご飯をおかわりするよう催促してくれた。「もう腹一杯だわ」と返す私は、その毎回のやりとりがやや面倒でもあり、嬉しくもあった。そして帰る時になると家の外まで見送り、去っていく私たち家族の車に向かって手を振っていた。

台所に立ち、昼食、お茶とお菓子、夕食を用意し、寝床をこしらえ、たまに座椅子で休んでテレビを見て、時折畑をかまい、毎日日記を付けていた祖母。そんな家の敷地から出ない祖母に、94歳にして街中へ引っ越す話が持ち上がった。私の叔父である長男が、街中に住宅を借りて一緒に住もうと持ちかけたのだ。祖父は自分たちがいつまで元気でいられるか分からないからと賛同したが、祖母ははっきり嫌と言わないかわりに首を縦にも振らなかった。その後半年、移住に向けた調整は進んでいった。祖母は次第に食が細り、転居予定の1週間前に入院となり、そこからはあっという間に亡くなった。私は祖母を亡くした悲しさとともに、祖母らしい最期だと感心した。

心理学に「ラポール (rapport)」という概念がある。フランス語源で「橋を架ける」という意味を持つこの言葉は、17世紀中頃から英語に派生して「信頼関係」の意を持つ。腰が曲がった小さな祖母の存在とその暖かな笑顔は、私の内のラポール感覚の源泉であろうと思う。

教育現場における、個のラポール、場のラポール

フリースクールを運営して、4月で10周年を迎えた。社会起業というほどの志を持って始めた記憶はない。身近な人に対して、自分の手の届く範囲のことを、一緒にやっていく。それだけを続けてきたつもりだ。高校と連携しているため高校卒業ができ、授業や教科学習も行うが、学校というより生活共同体のイメージでこれまでやってきた。

私が運営するフリースクール兼通信制高校サポート校には35名の高校生が在籍しており、生徒たちは週3～5日で登校をしている（年により小・中学生や大学生が通うこともある）。そのため、私は月曜から土曜までの週6日間、10時～16時くらいの間、1日あたり（多年齢や多学年が混ざり合った）18人前後の生徒たちと私も含め5名程度の職員とで、会話や勉強や遊びや活動（軽運動、音楽、料理・お菓子づくり、海・山・公園・街中の散策等）をしながら過ごしている。



スペース①



スペース②



スペース③

フリースクールという空間は、私にとって興味深いコミュニティである。その多くが小・中学時代に不登校の経験を持つ。中には、心療内科に通い服薬をしている、非行傾向があり更生施設に入った経験がある、診断名があり中学時は支援学級で過ごしていた、などの生徒もいる。そうでなくても、不安感が強く情緒の波が強い、友人関係でのトラブルが多い、集団の中で萎縮したり、強い違和感や居心地の悪さがある、家庭環境が複雑で情緒面または経済面等で不安定である、ある学習

や課題遂行において難が生じる、など目に見えにくい事情を複合的にもつ生徒は多い。全日制の学校では分離され個別対応をされがちな生徒たちが、フリースクールで一緒に集い、活動し、次第に人や場所に馴染み、それなりに過ごす。そんな面白みを感じながら10年間過ごしてきた。

先日、高校3年生のある女子生徒に、同じく3年生の男子生徒がふらっと近づき、話しかけ、笑いあっていた。大げさに言えば、私にとってそれは感慨深い瞬間だった。

さかのぼること2年前、この2人の生徒はまだお互いに友人がいない状態で出会い、なんとなく声を掛け合って（友人として）遊ぶようになった。そんな中で夏祭りの日に2人でショッピングモールに行き、女子生徒は自分の見たい化粧品などのコーナーを見て回り、男子生徒はその間退屈し、女子生徒の「居たくないなら帰ったら」という言葉をきっかけに家に帰った。男子生徒は女子生徒の身勝手に憤慨し、一緒に来たのに自分のやりたいことばかりで自分はほったらかされたと、怒った調子で私に訴えてきた。一方の女子生徒は、一緒に遊ぶ約束で行動していたのに勝手に帰ったと男子生徒を責め、退屈していたなら言うて欲しかったと、怒り、泣いて私に訴えた。

それから2人は一切口をきかなくなり、学校生活を別の友人と過ごしてきた。しかし2人ともその後も友人関係でトラブルが続き、1年時と2年時は短期間で友人と決別することがあった。しかし2年の途中頃から変化が見られ、2人とも次第に人づきあいが広がり、長く続くようになってきた。そんな中での、約2年ぶりの会話と笑顔であった。

この2人の経緯のように、人と人との関係性は思い通りにいくことばかりではなく、折り合いがつきにくいことがある。そんな中でも一緒に居続けてきたこと、そしてお互いの成長に伴って関係に自己修復が働いたこと理由の1つとして、個のラポールと場のラポールの作用があると考えている。

私にとっての心理臨床におけるラポールに関する一番の拠り所は、ロジャーズ選集にある「カウンセリング関係の質～具体的には、セラピストの一致性（純粋性）、無条件の肯定的配慮（尊重、受容、信頼）、および共感（クライアントの観点から理解すること）～の方が、セラピストの用いる特定の技術よりも、セラピー的变化にとって重要な要因である、と考えるようになった。」という一文である。

フリースクールのような教育現場においても、心理臨床の現場のように個と個のラポール形成は重要である。加えて、個のラポールを築くとともに、次第にその範囲を小集団に広げ、「場のラポール」を築くことが有効であると感じている。その際、上記の一致性、肯定的配慮、共感に加え、①初期不安を和らげる集団内の「安全感」の保障、②その集団における「相互理解」の醸成、③その集団成員の「公平感と納得感」の形成の3点が、場のラポールを形成する上で重要であると経験上仮定している。そしてこれら3点を実現するための構造的配慮を日々考え、工夫することが私の仕事の1つである。

語句注釈

※ Work as Life

西洋的にワークとライフを二分法で分けるのではなく、日本人が旧来から文化としてきた生活の中に労働を含み、「無理なく続けられることを、生活の中に入れ込み複数行う」考え方。百姓。東洋的であり、オンとオフの区別をつけない、「仕事の中にいながら生きている」「それがストレスなく生活と一致している」こと。メディアアーティストで、タレント、大学准教授でもある落合陽一氏が著書の中で提唱。この言葉を、著者が目指す生き方の方向性としてタイトルに据えた。

※ ラポール

小川（2019）は、斯波・佐野（2002）の言葉を引用し、ラポールの概念を定める際にどこまでをラポールと考えるかという範囲の問題、ラポールという言葉が臨床技法別に個別に解釈されて利用されてきたという背景の問題、歴史的にラポールの語義すら変遷しているという問題があり、普遍的なラポールの定義がないという問題があると言及している。そのためラポールの概念・語義が記されている辞典からその共通性に着目し、実際の臨床場面に即した、学派に捉われない広義の定義として、ラポールの語義を暫定的に「心理療法場面の初期に形成され、全過程を通して存在し続ける、相互的・共感的・受容的な関係性のことであり、面接を継続し、クライアントが防衛を解いて話したり自己の内面を見つめることができるようになるために必要な関係性である。」としている（斯波・佐野，2002，p.60）。

小川 瑛（2019）「心理臨床家の経験知に基づくラポールの定義について」Rikkyo Clinical Psychology Research 2019, Vol. 13, 15-24

斯波 涼介・佐野 秀樹（2002）『ラポール形成』に関する研究の展望 教育相談研究, 40, 61- 66.

※ロジャーズ選集(上・下)

H. カーシェンバウム/V.L. ヘンダーソン=編, 伊東博・村山正治=監訳 (2001) 誠信書房